

北樺太採集記(上)

玉貫光 一

私は一九二二年七月、八の兩月を薩哈噠軍政部の命を拜して「北海道帝國大學北樺太探檢隊」中の昆蟲班の一員として北樺太の採集旅行に従つた。永い間の問題であつた勞農ロシヤとの交渉も漸く結末を告げた今日、如斯非本質的な文章でも多少なりと役立つを得ればと考へて筆を執つた次第である。

一、ア港雜景

四日間の航海を無事に了した一千噸の海和丸は七月二十二日午後七時アレキサンドルフスク港(Alexandrowsk)に着く。間もなく汽船の周圍には陸軍運輸部のランチや傳馬船等が蜚の様に集まつて來た。上甲板に動く起重機の騒音や船夫達の叫音を外にして出迎へてくれた軍の人々も簡單な挨拶を交してランチに乗る。波浪避けのないア港では本船から舳に乗りうつるには非常な努力を要する。間もなく四町程前方に見えてゐた木造の棧橋に着く。無雜作に丸太を以て組建てられた百五十間程の長さを持つた此の棧橋にはそれでもトロツコの細長い線路が敷かれてあつて直ちに我々一行の荷物を運んでくれる。天産的にも人口的にも何等の恵みのない此の港には帝政時代のロシヤが一千八百八十年(明治十三年)に流刑囚徒植民政策の結果建造せら

れた此の木造棧橋が非常に尊重せられてゐる。

振返つて見るならば南方に少しく突出してゐるジエンキール岬を尖點として海岸線は心持ち曲つてゐるに過ぎなく、それが北方に延長してはほとんど直線のなつらなりをなしてゐるので、韃靼海峡を渡つて眞つ向に吹きつけるシベリア嵐に直接に見舞はれるのであるから實に悲惨な港なのである。港には市街の南端を通つて來る大亞河の濁流が注ぐので海の色が常に濁つてゐる。河口に近く日露戦役の當時坐礁した我が江都丸の殘骸が赤錆びしたまゝ、傾むいてゐるのも淋しい。棧橋から市街迄は約十町近くもあらうか、玉石を列べたロシヤ式の道路の兩側は全くの沼澤地であつてアツケシサウ Salicornia やウシホツメクサ Spergularia 等が一面に繁殖してゐる。市街に近づくに従つて面白い形態をなしたグイェツ Larix やケヤクマンノキ Alnus 等が見え、エゾツツ Picea アカトキツツ Abies 等の類も之に混じつてゐる。又シツバメセチ Lysichiton が非常に多く生えてゐるのも心をひかれる。

間もなくトルコ風な蟻狀に建てられた桃色の教會堂が薄暮の餘光のなかにはのかに見えて來た。此の日は土曜日であつたので夕邊の禱りの鐘の音が冷やかな空氣を透してほがらかに打ち

響いて来た。

橋を渡り小さな坂を登つて市街地へ第一歩を入れる。街の西端にある我々一行の宿舎へ入つた時には陽は全く沈んでしまつた。此の日は折悪く電燈に故障が生じてゐて軍隊用の太い西洋蠟の燈火の下で偉大なニューム製の食器で夕べの夢飯をしたためたのである。夕飯後宿舎の附近を散策する。宿舎の後手は直ち



ア 港 教 會 堂

に小坂になつてゐてその下にはさゝやかな小川が流れてゐる。その流れを涉つて五六町の間は今通つて来た棧橋から市街へ入る迄と同様な沼澤地を以て形成せられ、それを越えるさ一つの小灌木の繁つた丘陵になつてゐて、此處を利用して露人達の墓地が出来てゐる。即ち南方のジョンキイルの高臺と北方の此の墓地である丘陵とその眞向ひの市街地をなしてゐる丘陵との三

つの高臺は地質學的に見て非常に面白いもの、様に思はれる。ジョンキイルの丘陵と市街地の臺地との間には大亞河が流れてゐる。ロシアの市街が此處に開かれたのも實に此の河の流域に發達を遂げた沖積層の影響が甚だ多いこと、思はれる。我々の宿舎の後の低地や棧橋から市街に入る迄の沼澤地等の植物の分布状態等から察しても之等の土地は餘り新しいものでないことは明らかである。即ち太古時代には海江が深く滯入してゐて一方は今の教會堂のある所と一方は我々の宿舎の附近へ迄も入りこんで現今ではその海岸線が非常に單調なものになつて了つてゐるがその時代には細長い二箇の小灣を形取つてゐたものではあるまいか。教會堂附近と墓地の丘陵とからは遠く渤海或は金時代らしき石器の類が發掘せられるさうである。又我が徳川時代の地圖を見ても此の附近にはギリヤークの村落が存在してゐる。以上の事から察して此の附近は古くから人類の集合地であつたのであらう。

九時近く一同ア港の銀座とも稱すべき周防町の公開堂へオハラミダンスミを見物に行く。七月末の北國の夜はもうすら寒い。幅の廣い道路を挟んで植えられたアカハダナカマド (Spiraea) やドロノキ (Populus) が暗いそよぎを見せてゐる。壹圓五拾錢と云ふ随分高い觀覽料を拂つてホールに入る。はるかに西伯利の果よりホルシエズムの革命の戦渦を逃避して來たのだと云ふ貧しい旅役者達の芝居を見てゐる時私は一種の淋しい氣持ちになつて行つた。部屋の正面に教壇の稍々廣い位の臺を置いた急作りの舞臺を中心におどけた扮装をして立ち廻る處より察して

この劇の性質 一種のコメディらしい、臺詞は全く解らないがムシユウと云ふ佛蘭西語だけが聞きこれた。

電燈の無い今夜の天井に點もされた蠟燭の明滅は一層我れ我れの胸のなかにエキゾチックな感じを抱かせる。

十一時頃にこの劇は終つて舞臺装置や觀覽椅子の類が片隅に片付けられて愈々若い人達の舞踏が始まる。

この公會堂と稱せられてゐる建築物は露西亞語ではナローウドロームと呼ばれるもので露西亞の少し開けた村落には必ず設備せられてあつて或ひは舞踏場に、或ひは劇場に、或ひは各種の集會場に充たされる一種の社會的享樂機關なのである。



日曜日のア港の娘達

黒いパシカの青年が古風な手風琴を奏し始めると沈黙勝ちであつた人々は放たれたもの、様にごよめき出した。そして相手を得た幾組かのものば既にワンステツプを踏み出した。五六

度も圓を畫がくき休憩し煙草や紅茶を求めては再び踊り續けるのである。かくして此の舞踏は繰り返して繰り返して夜明け前までも行はれるのである。ダンスの種類も極めて朴訥なもので、手風琴やバラライカのクラシカルな音律を追ふて踏まれてゆくのである。

十二時過ぎた冷やかな夜風に吹かれて一同は宿舍の固いマットに樺太第一夜の夢を結んだのである。

次の日は折りよく日曜日であつたため、軍政部に隣接してゐる教會の朝禮に參する事が出来た。一脈の階調をなして灰色のア港の空に高く低く響きわたるなかなを正裝した女達が打ち連れて教會の門を潜るのに従がつて廣莊な會堂へ入る。今し勸行の最中と見えて金燭の司祭が高々と讀み上げる浩瀚なるラテン詞の經文が朗らかに響き、助祭の打ち振る香具の強い香りも一種の雰圍氣を形ちなしてゐる。間もなく奥の部屋からは聖詩唱者の歌ふ尊嚴な男性コーラスが響いて来る。その重苦しいリズムは異教徒である私達にさへ一種の宗教的な力を感じさせる。玄關には受附が置かれて獻金者のみを聖詩唱者の居る奥の間へ通す様にしてゐるのは皮肉である。

思ひ詰た様に胸に十字を畫く人々の多くはつゞれを纏ふた老人達で、中には松葉杖を便りにしてゐる様な人々さへもあつた。禮禮に列してゐる男達が脱帽してゐるに反して婦人達が帽子を被つたまゝでゐるのも習慣の面白さを示してゐる。

祝福の高らかなパイプオルガンを聞き乍ら此様な根強い宗教

心を深く藏してゐる國民に「宗教はアヘンである」と稱してその信仰力を掃滅せんとする勞農ロシアの政策は果して大成出来得るだらうか等とせりとも無い考を抱いて私は街中へ出た。此の教會も本國の革命の結果一切の經費は途絶し、主僧等は或る商會の事務員をなして辛うじて露命を繋いでゐたのであるが一九二〇年に我が軍が保證占領をして以來その經營費を支出せられるに至つて再び朝夕の聖鐘は炯々として彼等の身境に應へる様になつたのである。

私はいつか旭町と云はれる赭土の露出した埋立地の様な一角に立つたバザールの中に入つてゐた。

一週に一度バザールを取り巻く人々はカーキ色の軍人、ロシア人、白衣の朝鮮人、それに支那人、時々は近在の部落から来るギリヤークと云ふ様に宛然人種の展覽會の觀がある。ア港の西、豊饒の耕地であるコルサコフの村からはロシア獨特の四輪の馬車に馬鈴薯、朝鮮白菜、キャベツ等の新鮮なる野菜等や草花の類を滿積して百姓達が出て来るし市街のロシア人、日本人支那人達は各種の日常品をたすきへて店を張る。若いロシアの娘達が手下げ籠に野菜や草花を入れて打ち連れて歸つて行く姿等は印象派の畫である。

歸り道に周防町の高村商會へ立ち寄つて帝政時代のア港の話等を聽く。此の町も昔時は人口が現今よりも二千人以上も多し一萬を算し、市役所、測候所、裁判所、收税署、養老院等が整つて近代都市の面目を持つた立派なものであつたさうである。

前世紀の彙葉、日本で巡查津田某の爲めに撃たれ、遂に此の

地には行啓を爲されなかつたが、その来る日の記念として建てられた教會の坂上に聳えてゐる記念塔はその往時の殷盛を思はしむるに充分である。

冬になると零點下二〇度から四〇度の間を上下する寒氣の中に平氣で生活してゐる彼等の家屋は如何なる形式で建てられてゐるか。

それは所謂丸太小屋と稱する一種の倉校式の建築で、壁は二尺又は三尺程もある非常な厚みを有し、戸口は二重又は三重に構え、玄關から入つて小さな部屋を二つも三つも通つて始めて居間に入るさ云ふ様になつてゐる。勿論窓も二重になつてゐて障子の簾は普通上げ下げの出来るもので、疊間性多く扉になつてゐる。その二つの窓の間隔も七八寸位より廣いのは尺餘に及ぶ位にして、外部の寒冷な空氣と内部の温たかな空氣に醸もされて水蒸氣が溜るのみ防ぐ爲めにはその中間に綿と木炭とが敷いてある。又立派な家などでは濃硫酸を入れた壺を裝置してゐる所等もある。

屋根や床板も亦二重張であつて、床と屋根の二重張の中間には土を詰めて襲ひ来る寒氣を完全に征服する、尚ほ又室内にはペーチカを燃いて暖を採るのであるから防寒の備は完璧なのである。

その代り通風の具合が悪いので、之を補ふ爲めに窓際にはフクシアやテンシクアフヒ等の内地々方でも冬の日を忍ぶことゝの難かしい熱帯性の植物を配置して清潔と觀賞との二つを獲得してゐる。

ギリシヤ教を奉じてゐる彼等はその居間には必らず受難のキリストの肖像を見え事が出来、又それに列べて既に亡きロマノフ王朝の人々の肖像畫をも掲げてゐるものも傷ましい。ロシヤ更紗のカーテン、サモアル、皮帽子、マドロスパイプ、木製の鏡臺、羽毛蒲團、ウオツカ、さう云ふ種類が置かれてゐる彼等の室内に一度足を入れるならば我れ我れはいつでもツルゲーネフの小説の主人公になれるのである。

過激派と保證占領の餘波をうけてア港は亂雜と淫蕩の匂ひが漂よつてゐるが、少し市街を遠ざかつた周圍は夏季の唯一の花である青い矢車草や、ヒメホテイラン(*Calyso*)や、クルマユリ(*Lilium*)や、シロユリ(*Fritillaria*)や、アムウルトナミヨ(*Dianthus*)やアツモリサウ(*Cypripedium*)等に窓先を飾つた家々があり芝生には、小豚や山羊や鷺鳥や鶉の類が紅毛碧眼、跳足の子供達の親しい友達になつてゐる。

此の牧歌的なロシヤ街を離れて、曙町や旭町等と云ふ下町の日本街へ下りるならば、何れも間口も奥行も一間半位の急場造りのバラックが立ち並び、不潔な飲食店が多く、雜貨店、菓子屋、呉服屋等がその間に挟まつてゐる。その通りを角刈りに單衣物と云ふ風の男や鬘れかゝつた髪、艶のない顔色の下駄履きの女達の親愛なる日本人諸君が往來してゐるのであるが我れ我れは此處にも嘗つてシベリヤに於けるが如き軍隊の寄生蟲とも稱すべき浮浪移民の哀れを見せつけられるのである。

二十六日私達は採集をしつゝ、約一里程も離れてゐる兄弟三人岩の附近に出かけて見た。海は丁度干潮時であつたが海濱の動

植物は極めて少なく、アナノリ、アナサ等が岩に附着し砂上には昆布類や紅藻類の數種が打ち擧げられてゐるに過ぎない。貝類では二枚貝の一種や、タマガヒ、等を見たのみである。ツヨンキール岬の北側には中生代の堅い砂岩の層が露出してアンモン介、イノセラムス(*Inoceramus*)やヘルシオン(*Ferion*)等の大形の介類の化石が多く出る。

樺太の土を踏んで非常に驚異するところはエツシロテフ(*Abotia crataegifolia*)が非常に多いことである。それは丁度内地や北海道に普通に見られるモンキテフ(*Colias*)やモンシロテフ(*Pieris*)等の様に至る所を飛翔してゐる。これはその食餌であるサンザシ(*Crotagus*)やキイチゴ(*Rubus*)等の薔薇科の植物が多く分布してゐるのと非常に關係のあるものである。

一路ア港の市街へ續く道路の兩側に繁茂してゐる繖形科植物の花上にはハナカミキリ類(*Lepidinae*)やハナムグリ類(*Trichogramma*)が多く中にも元氣のよいアナマシナガハナカミキリ(*Grapholium viridipunctus* Lew.)や、邦領では樺太以外には未だ知れてゐないアナハナカミキリ(*Leptura virescens* L.)等が一番多く集まつてゐる。

十字科植物の蔕かれてゐる畑には歐洲地方に産するカホモンシロテフ(*P. brassicae* L.)ではなからうかと思ふほど大形なモンシロテフ(*Pieris rapae curvirova* Boisdu.)が稀に二三匹集まつてゐる。

今日得た採集品から考へると北へ進むに従つてその昆蟲は個體に於て非常に多く種の種類は比較的減少せられるのではな

からうかと思はれる。

夕陽の影がほゞけたラマスの類に落ちる頃私達は宿舎へ歸

つて明日の奥地入りを待つたのである(未完)

地理教材としての地形圖 (十二)

松本近傍

所要圖 二十萬分一帝國圖、高山・長野、五萬分一地形圖、大町・池田・松本・鹽尻、二萬五千分一地形圖、松本近傍、二十萬分一地質圖、高山・上田。

一、地貌・地質及地質構造

帝國圖高山號の東部を占むる松本盆地は北々西―南々東に向ひ、延長五二籽、幅は北に狭く南に廣く松本附近に於て約一二籽、面積概測三七〇方籽、盆地は北と南とに高く大町・鹽尻附近は七二〇米乃至七三〇米、中央部に向ひて漸次に低く、明科犀川橋附近は五二〇米である。盆地の西には飛驒山地の東縁が障壁をなして峙立し有明山・常念嶽・鍋冠山・蝶ヶ嶽・小嵩澤等二七〇〇米前後の山嶽が前山狀をなし、更に西方には

燕嶽・大天井・東天井・穂高嶽・槍嶽等三〇〇〇米内外の峻峯が階段狀をなして聳ゆ。これに反して盆地の東方は著しく低く、一〇〇〇米乃至一五〇〇米にして二〇〇〇米に及ぶは王ヶ鼻附近の新火山に於て見るのみである。

地質圖を觀察するに飛驒山地は主として秩父古生層及之を貫く花崗岩・玢岩によりて構成せられ、古生層は常念嶽の南方より鍋冠山・小嵩澤山・八森山脈附近に發達し、木曾山脈に屬する鹽尻附近の山地亦これに屬す。岩石は粘板岩・硬砂岩・硅岩・石灰岩等で、多くは東北の走向を有する。花崗岩は北方に露出多く、常念嶽・大天井